The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 再帰構文における再帰代名詞省略の歴史的変遷 : アメリカ英語を中心に |
| Author(s) | 大津, 智彦 |
| Citation | 大阪大学英米研究. 2023, 47, p. 21-37 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/99590 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 再帰構文における再帰代名詞省略の歴史的変遷

## ーアメリカ英語を中心にー

大津　智彦

### 1　導入

現代英語の再帰構文において再帰代名詞が省略されることがあるのはよく知られている。例えば Quirk et al（1985: 358）は次のような場合、意味の違いをほとんど伴わず再帰代名詞の省略が起きているとしている。

a. He has to shave himself twice a day.
b. He has to shave twice a day.

Quirk et al（1985: 358）はこういった動詞を semi-reflexive verbs と呼び、下記の動詞をその他の動詞として挙げている。

| | |
|---|---|
| adjust（oneself）to | dress（oneself） |
| hide（oneself） | identify（oneself）with |
| prepare（oneself）for | prove（oneself）（to be） |
| wash（oneself） | worry（oneself） |

一方、Huddleston and Pullum（2002: 302）は Unexpressed reflexive object: *I must shave* というセクションにおいて Quirk et al（1985: 358）と同様の動詞を挙げた上で、“The intransitive versions are in most cases much more frequent than the overt reflexives”として、Quirk et al（1985）では触れていなかった

再帰代名詞の省略の頻度に関して言及している。

このような再帰動詞で再帰代名詞が省略される傾向については 20 世紀初頭より指摘があった。Jespersen（1927: 325）は 1927 年の時点で次のように述べている。歴史的な視点に立っている点に注目したい。

In a great many cases the verb as used intransitively represents an older reflexive verb. … The tendency is towards getting rid of the cumbersome *self*-pronoun whenever no ambiguity is to be feared; thus a modern Englishman or American will say I *wash, dress,* and *shave.*

Visser（1963: 146）も次のように述べ、歴史的に再帰代名詞を省略する傾向があったことを述べている。

As appears from the subjoined evidence it is also wrong to single out the Present Day period as characterized by the tendency to ‘drop’ the reflexive complement. *Wash, oversleep, miscarry, dress, compare, bathe,* for instance, are already used without reflexive object in Middle English. Yet it is true that with some verbs—such as *disport, enlist, form up, separate, spread, submit, trouble*—Pres. D. English shows a decided preference for the shorter construction.

また、Foster（1968: 204）ではアメリカ英語に基づく新しい構文として ‘to adjust oneself to’ から ‘to adjust to’ へ、‘to identify oneself with’ から ‘identify with’ へ変化していることをイギリスの高級紙から例を挙げて示している。

以上より現代英語においては再帰動詞の目的語となる再帰代名詞は省略される傾向にあり、その傾向は現代英語のみならず歴史的に継続しているものであることが分かる。しかし、これらの文法書や概説書では再帰動詞が現在どの程度、再帰代名詞を省略するのか、そしてどのような歴史的推移を経て現在の状態に至ったのかについてや省略が起こる条件までは記されておら

ず、これらの点に関して詳細な研究の余地があると言える。そのような視点から行われた先行研究で筆者が見つけることができた主要なものはRohdenburg（2009b, 2014）である[1]。Rohdenburg（2009b）はempty, oversleep, overeat, keep, commit, brace, disport, get, pledge, organize（organise）などの動詞について史的および／または現代英語のデータベースに基づいて再帰代名詞の有無を数値で表したものである。Rohdenburg（2014）はRohdenburg（2009b）を補完する形でadapt, squeeze, disengage, surrender, intrude, adjust, reconcileなどの動詞について同様の調査を行っている。両研究共にイギリス英語とアメリカ英語を対象にしており、どちらの英語でも今日に至るまで再帰代名詞の省略が続いているが、アメリカ英語がそれをリードしていると結論付けている。ただ、Rohdenburg（2009b, 2014）では、①使用しているコーパスが史的なものでは多くの場合、50年以上の刻みであること、②20世紀の現代英語については1990年代の英語を中心としたコーパスを使用していること、③コーパスのテクストジャンルが史的コーパスはフィクション、現代英語では新聞に限定されている、など当時の研究環境からやむを得ない制約があり、2022年の現時点ではさらにきめの細かい調査が可能であると考えられる。

以上の理由からこの調査ではさらに年代を細かく刻みながら過去から現代まで各年代がシームレスにつながり、テキストジャンルも複数にわたるコーパスを用いた調査を行うことを目指した。現時点でその目的に叶うコーパスはMark Daviesが Web上で提供しているCorpus of Historical American Eglish（COHA）である。COHAはこれまでの調査でも使用したことがあるが念のため簡単に説明しておくと、テキストジャンルはFiction（TVとMoviesを含む）、Magazine、Newpaper、Non-fictionからなり、Mark Daviesの言葉を借りると、“This balance across genres and sub-genres allows researchers to examine changes and be reasonably certain that the data reflects actual changes in the “real world”, rather than just being artifacts of a changing genre balance.”[2]と言える。年代については1820年代から2010年代まで10

年刻みの編集であり、10 年毎の語数もほとんどの場合 1000 万語を超え十分な語彙数を備えている。こういったことから、19 世紀初頭から現在に至るまでのことばの変化を相当正確に捉えられることが期待できる。

## 2　調査の方法と結果

### 2.1　調査方法

COHA をコーパスとして使用するため必然的に対象となる英語はアメリカ英語であり、時代は 1820 年代から 2019 年までとなる。アメリカ英語は導入で記したように再帰代名詞の省略を先導した variety であることからアメリカ英語での省略過程をまず詳細に調査する意味がある。また、時代に関しては現代英語において再帰代名詞の省略が起こることは Quirk et al（1985）や Huddleston and Pullum（2002）などの文法書において記述のあるところではあるが、アメリカ英語に関しては Visser（1963: 146）によると Barlett（1848）の著作の中に conduct の自動詞用法を“an offensive barbarism”と呼んでいるとの言及があり、1800 年代は再帰代名詞の省略がまだそれほど浸透していなかったと推測できる。よって、19 世紀初めはアメリカ英語の最初期ではないがそこを調査の起点とすることは十分に意味のあることであると考えられる。

なお、調査対象とする動詞は Foster（1968）、Shapiro（1999）、Rohdenburg（2009b, 2014）などこれまでに史的観点に立つ研究で調査や言及の対象となっている adjust（oneself）to、adapt（oneself）to、commit（oneself）to、identify（oneself）with、surrender（oneself）to の 5 つの動詞とした。検索においてはそれぞれの動詞の基本形に（onself）to を加えたフレーズを検索語として用い、現在形複数と不定詞形のみを抽出し、屈折形は対象から外した[3]。なお、to が前置詞ではなく不定詞のマーカーになっている用例が混入しているケースが推測されるが、ごく少数であるのであえて除外する手間は取らなかった。また、次の例のように検索上は動詞と前置詞が連続して抽出

されるが実は動詞が他動詞の場合がある。しかしこのような例をすべて除外するのは非常に手間がかかる作業なので大局に影響を与えない例外として今回の調査では取り除かれていない。

（1） It is to be conceived as the consequence of an increasing acceptance throughout the world of the inner principles of a common law which all the various parliaments representing the separate communities of mankind respect and *adapt to* the variety of their conditions. （NF/ACAD 1937　イタリックは筆者）

## 2.2　調査結果

まずは adjust（oneself）to について見ていきたい[4]。adjust　oneself　to の COHA での初出は 1823 年の（2）の例である。図 1 が示すように、この再帰動詞は最初期から頻度を減らしていくのではなく、むしろ 1820 年代から 1910 年代までは増加傾向を見せ、1920 年代より減少していく。1800 年代において adjust　oneself　to の頻度が増加していく様子というのは先行研究では窺えなかった現象で注目に値する。*Oxford English Dictionary Online*（以下 OED Online）によるとこの用法の初出例は 1700 年（adjust 4.a.）であるため中英語期から存在していたわけではなく比較的新しく、使用頻度自体が 19 世紀初頭ではまだ低く、徐々に頻度を増した可能性が考えられる。また、図 2 から分かるように、再帰代名詞が省略された adjust　to が 19 世紀の間ほとんど現れていないことから 19 世紀においては再帰代名詞を取る傾向がまだまだ強かったとも言える。

（2） There was Clayton, now ── I began to like him ── keeping his horse's head in line; and whenever he could get an opportunity, trying to adjust himself to the saddle, and sit like Archibald. （FIC 1823）

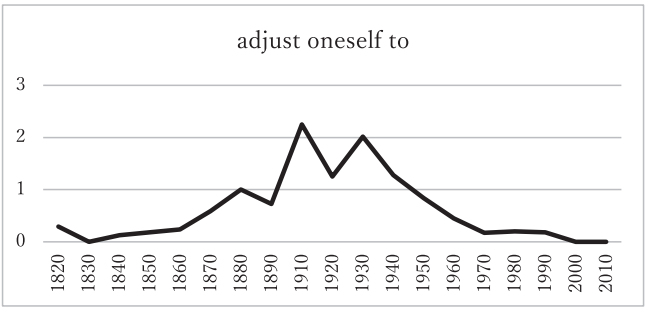


**図 1　adjust oneself to の年代別変遷（縦軸は 100 万語毎の頻度）**

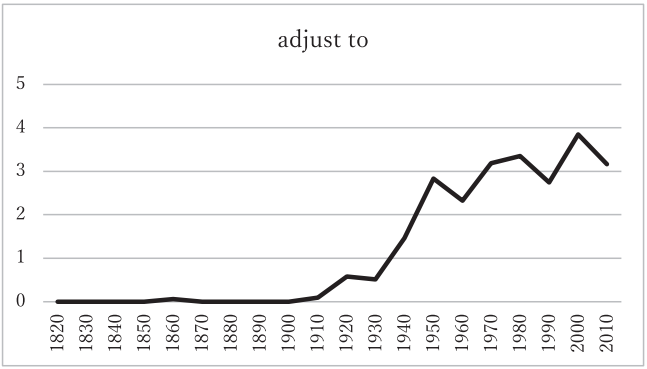


**図 2　adjust to の年代別変遷（縦軸は 100 万語毎の頻度）**

もうひとつ注目したいのが、adjust oneself to が 1910 年代まで増加を見せたあと減少を始めるのに呼応して adjust to が 1920 年代より増加を始めることである。グラフから前者の減少がそのまま後者の減少につながっている様子が窺える。これもまた先行研究では見ることのできなかった現象であり、今回の調査のように 10 年刻みにシームレスな形でデータを取ることのできるコーパスを利用することの意義を示すものである。adjust to の 1920 年代の例を次にひとつ挙げておく。

(3)　He begins to develop patterns of response in his very first attempts to adjust

to his environment. （NF/ACAD 1929）

次に identify oneself with を見ていく。この再帰動詞の OED Online における初出例は 1718 年（identify 2.a.）であり、adjust oneself to と同じく比較的新しいためか、図 3 から分かるように 20 世紀前半までは増加を示している点が相似している。つまり、1820 年代以降 1930 年代までは方向性が定まらないまま推移するが 1940 年代から増加に転じ 1950 年代に頂点に達した後、頻度が急減しはじめる。また、図 3 と図 4 を比較して見れば分かる通り、ここでも 1960 年代以降、再帰代名詞構文（identify oneself with）が減少に転じるのとはぼ同時（1950 年代）に自動詞構文（identify with）が増加を始めている。図 3 と図 4 のグラフでは縦軸の目盛り幅が異なるので単純に比較はできないが、前者の折れ線の下降と後者の折れ線の上昇が対照をなしている様子に注目されたい。再帰代名詞構文と自動詞構文は一方の衰えに比例して他方が勢いを増している模様を見せている。

下に COHA での identify oneself wtih の初出例と identify with の 1959 年の例を挙げておく。

（4） You join the ranks of the enemy, and identify yourself with them.
（FIC 1824）

（5） Bird-lovers identify with birds. （FIC 1959）

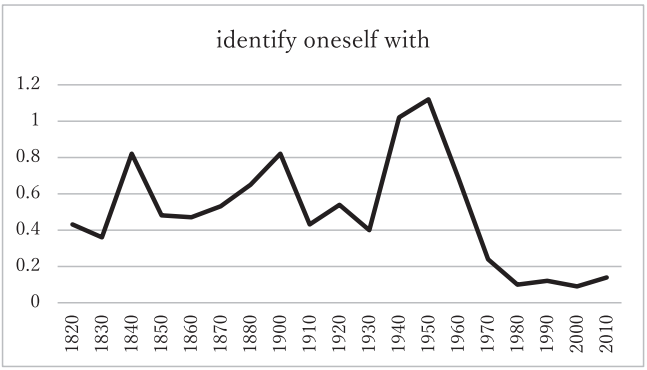


**図 3　identify oneself with の年代別変遷（縦軸は 100 万語毎の頻度）**

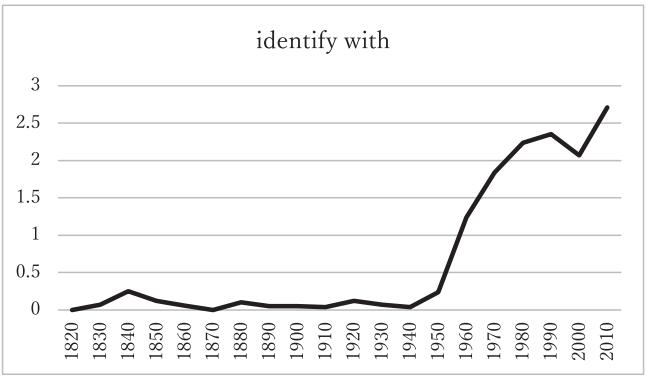


**図 4　identify with の年代別変遷（縦軸は 100 万語毎の頻度）**

次は commit（oneself）to である。この動詞について Shapiro（1999: 333-5）は再帰代名詞の有無に関する変化が“a change in progress”であるとして注目し、下記の引用にあるようにその時期まで特定している。

The change from an obigatory reflexive after *commit* to its nonuse or optional use can be traced approximately to the period between 1969 and 1992, the dates of the first and third editions of the *American Heritage Dictionary* of *the English*

*Language.*

さて、Shapiro（1999）の観察が実証されるかどうかまず図 5 のグラフから見てみる。commit oneself to では identify oneself with の場合と同じく、1820 年代以降 20 世紀半ば近くまで（1940 年代）までは方向性が定まらないまま推移するが 1950 年代から増加に転じ 1970 年代に頂点に達した後、頻度が急速に減じ始める。他方、commit to についてはこれまで見てきた自動詞構文とは少し異なる推移を示している。図 6 では 1820 年代には一定の頻度で出現していたものが、1950 年代まで漸次減少し、1960 年代から増加を始める。自動詞構文が 1950 年代まで減少するという部分がこれまでとは異なるわけだが、commit oneself to が 1980 年代より減少をし始め、commit to は 1960 年代から増加を始めるという調査結果は Shapiro（1999）の引用にある“The change from an obigatory reflexive after *commit* to its nonuse or optional use can be traced approximately to the period between 1969 and 1992”という部分にほぼ合致し、Shapiro（1999）の観察が正確であることを立証すると同時に今回の COHA を使った調査の有効性もサポートしているものと見做すことができる。なお、commit to が 1820 年代には一定の頻度で出現していたところ、1950 年代まで漸次減少していく理由については現時点では不明であり、今後の課題としておきたい。commit（oneself）to の用例を（6）、（7）に挙げておく。

（6） Let us commit ourselves to God. （NF/ACAD 1829）

（7） He could commit to a new offensive. （NEWS 1968）

**図 5　commit oneself to の年代別変遷（縦軸は 100 万語毎の頻度）**

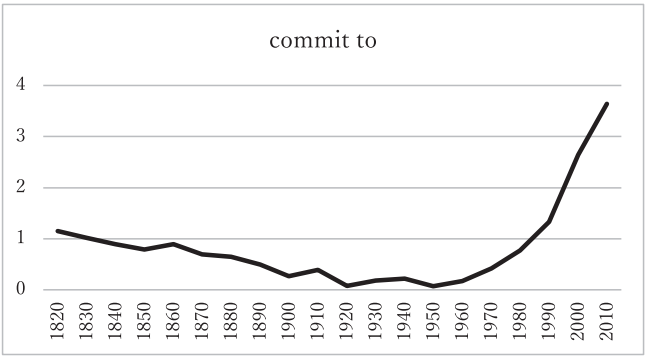


**図 6　commit to の年代別変遷（縦軸は 100 万語毎の頻度）**

次は adapt（oneself）to である。図 7、8 を参照されたい。この動詞の描く折れ線グラフの形状は比較的単純である。すなわち、基本的に adapt oneself to は 1800 年代初頭より増加傾向を示し、1910 年代に頂点に達した後、1920 年代より減少を始める。adapt to は 1920 年代までほとんど用例がないが、1930 年代以降、増加を始める。前者と後者の増減の時期が近接しており、また、前者の減と後者の増を示す折れ線グラフの傾斜も反比例を示すかのような形状を見せている。adapt oneself to は adjust oneself to と意味の類似性

があるが、両者が示すグラフの形状にも類似性が認められる。用例を（8）、（9）として挙げておく。

（8）　They adapt themselves to the wants and circumstances of mankind.
（MAG 1829）

（9）　A 14-year-old unquestionably can adapt to more complex situations than a 6-year-old.　（MAG 1945）

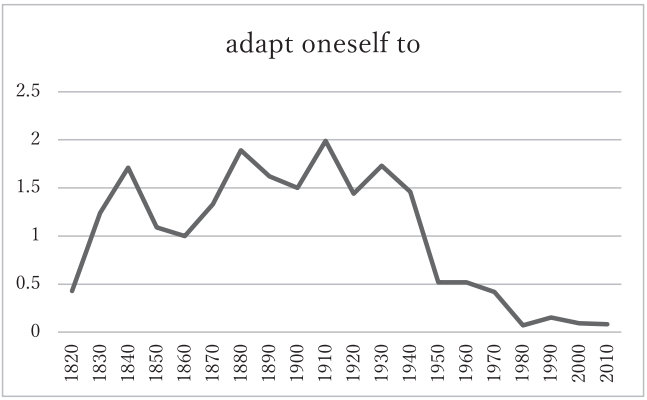


**図 7　adapt oneself to** の年代別変遷（縦軸は **100** 万語毎の頻度）

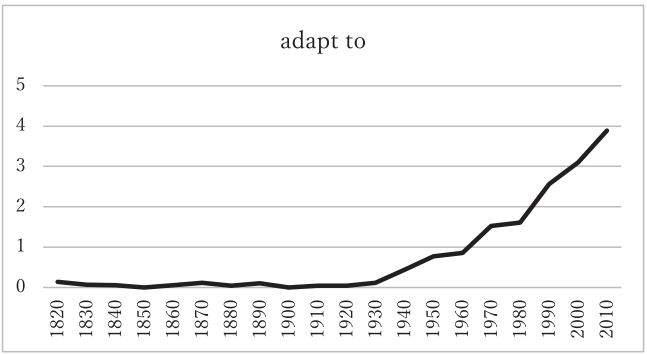


**図 8　adapt to** の年代別変遷（縦軸は **100** 万語毎の頻度）

最後に surrender（oneself）to を見てみる。図 9 から surrender oneself to については 1820 年代よりゆっくりとその頻度が減少していっていることが分かる。上記の 4 つの動詞のようにどこかの年代で頂点を迎えることがなく、また最初から最後まで surrender to よりも頻度が圧倒的に低い点にも注目すべきである。つまりこの動詞については 19 世紀初頭から再帰代名詞構文よりも自動詞構文の方が優勢なのである。図 10 から surrender to の推移を観察すると 1920 年代に頂点があると言えなくもないが、ほぼすべての年代を通して大体、100 万語毎に 1、2 例と一定の頻度で現れていると見ることもできる。これはどうしてだろうか。OED Online で surrender oneself の初出例を調べたところ、下記の通り初出が 1585 年であった。

1585 T. Washington tr. N. de Nicolay Nauigations Turkie i. xix. 23 Fainte heartedlie to surrender themselues to the mercie of those, at whose hands was nothing to be looked for, but miserable seruitude. （OED Online 3.a.）

これにより surrender oneself に頻度が既に 19 世紀において低いのはその初出が他の動詞に比べ早いため、再帰代名詞の省略がより早く起こったためと推測される。もちろんこの点については別途調査が必要である。

（10）、（11）に各構文の例を挙げておく。

（10） I surrender myself to the laws of the land. （FIC 1827）

（11） His bright idea was that England would at once surrender to the threat. （MAG 1920）

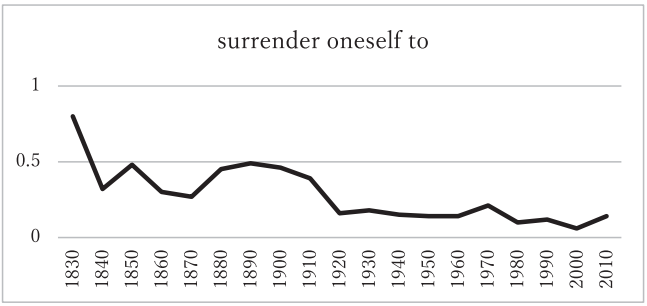


**図 9　surrender oneself to の年代別変遷（縦軸は 100 万語毎の頻度）**

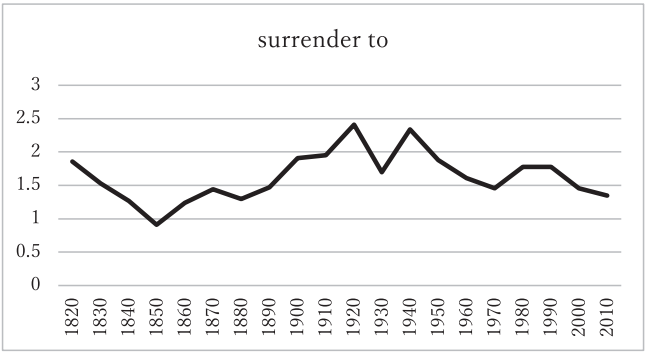


**図 10　surrender to の年代別変遷（縦軸は 100 万語毎の頻度）**

## 3　まとめ

以上、5 つの動詞について再帰代名詞の有無の変遷を見てきた。COHA を使うことによって再帰代名詞の有無の史的変遷について、これまでの研究では観察できなかった軌跡をシームレスな形で追うことができた。そのなかで、①surrender を除く 4 つの動詞において 19 世紀初頭から 20 世紀半ば前後まで再帰代名詞を伴う再帰構文の頻度が増加し続けたあと減少に転じる、②20 世紀半ば前後より再帰構文の減少と反比例するように再帰代名詞を伴

わない自動詞構文が増加しはじめる、③surrender　oneself のように再帰動詞としての初出が比較的早い動詞では 19 世紀時点で既に自動詞構文の方が優勢であることから、再帰動詞の初出年と再帰代名詞を伴わない自動詞構文の発達は関連性がある可能性がある、といった点が明らかになった。

課題として残るのはどのような条件下で再帰代名詞の省略が始まったかということである。筆者がこれまで行ってきた英語の統語上の変化にかかわる研究から、言葉の変化はまず変化しやすい環境から始まって徐々に変化しにくい環境へと波及していくことが分かっている。それは例えばテキストジャンルの formality であったり、当該語句の周辺の統語的複雑さなどを含む統語的な条件であったりする。Rohdenburg（2014）は種々の条件下での再帰代名詞の有無を検討しているが、筆者もそれらを再検証するとともに新たな条件を発見すべく用例ひとつずつを吟味した調査を今後行いたい。

## 注

1　Peitsara（1997）は再帰構造の発達を扱った史的研究であるが、Helsinki Corpus を利用しており 1710 までのデータとなっている。

2　https://www.english-corpora.org/coha/help/texts.asp

3　-ed で終わる過去形を含めた場合、過去形のみならず受動態を導く過去分詞形まで大量に抽出されるためそれらを排除するには多大な時間を要すること、COHA の規模が大きいため現在形（複数）と不定詞形だけで十分な用例数を得られること、先行研究において屈折形が再帰代名詞の有無に影響を与えるとは示されていないこと、などがこの手段を取った理由である。

4　COHA の検索は Web 上で Search の Chart を指定して行った。グラフの元となったデータは付録に記載しておく。

## 参考文献

Bartlett, John Russell.（1848）*Dictionary of Americanisms.* New York: Bartlett and Welford.

Davies, Mark.（2010）*The Corpus of Historical American English*（*COHA*）. Available online at https://www.english-corpora.org/coha/.

Denison, D.（1998）“Syntax.” In S. Romaine,（ed.）, *The Cambridge History of the English*

*Language,* Vol.IV. Cambridge: Cambridge University Press, 92-329.

Foster, B.（1968）*The Changing English Language.* London: The Macmillan Press.

Huddleston, R. and G. K. Pullum（2002）*The Cambridge Grammar of the English Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Jespersen（1909-49）*A Modern English Grammar on Historical Principles,* Part III. London: George Allen & Unwin Ltd.

*OED Online*（2022）Oxford University Press. September 2022.

Peitsara, Kirsti.（1997）"The Development of Reflexive Strategies in English." In Matti Rissanen, Merja Kytö, and Kirsi Heikkonen（eds）, *Grammaticalization at Work,* Berlin: Mouton de Gruyter, 277-370.

Quirk, R. et al.（1985）*A Comprehensive Grammar of the English Language.* New York: Longman.

Rohdenburg, Günter（2009a）"Grammatical Divergence between British and American English in the Nineteenth and Early Twentieth Centuries." In Tieken-Boon van Ostade, Ingrid and Wim van der Wurff（eds）, *Current Issues in Late Modern English,* Bern: Peter Lang, 301-329.

Rohdenburg, Günter（2009b）"Reflexive Structures." In G. Rohdenburg and J. Schluter（eds）, *One Language, Two Grammars?* Cambridge: Cambridge University Press, 166-181.

Rohdenburg, G.（2014）"Reflections on Reflexives in Modern English." *Anglia,* 132（3）: 536-574.

Shapiro, M.（1999）"The Change of Government of *Commit* 'Pledge/Bind Oneself'." *American Speech,* No.74: 333-335.

Siemund, P.（2014）"The Emergence of English Reflexive Verbs: An Analysis Based on the *Oxford English Dictionary.*" *English Language and Linguistics,* 18.1: 49-73.

時崎久夫（1997）「英語における再帰代名詞の出没」『文化と言語』（札幌大学外国語学部紀要）第 31 巻第 1 号，53-81.

Visser, F. Theodorus（1963）*An Historical Syntax of the English Language,* Part I. Leiden: Brill.

# 付録

## adjust oneself to

| SECTION | ALL | 1820 | 1830 | 1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | 2010 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| FREQ | 319 | 2 | 0 | 2 | 3 | 4 | 11 | 20 | 15 | 33 | 52 | 32 | 56 | 35 | 24 | 13 | 5 | 6 | 6 | 0 | 0 |
| WORDS (M) | 405 | 7 | 13.7 | 15.8 | 16.5 | 16.9 | 18.8 | 20.1 | 20.4 | 22 | 23.1 | 25.7 | 27.7 | 27.4 | 28.7 | 29.1 | 28.8 | 29.9 | 33.1 | 34.8 | 35.5 |
| PER MIL | 0.79 | 0.29 | 0 | 0.13 | 0.18 | 0.24 | 0.59 | 1 | 0.73 | 1.5 | 2.25 | 1.25 | 2.02 | 1.28 | 0.84 | 0.45 | 0.17 | 0.2 | 0.18 | 0 | 0 |

## adjust to

| SECTION | ALL | 1820 | 1830 | 1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | 2010 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| FREQ | 750 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 15 | 14 | 40 | 81 | 68 | 92 | 100 | 91 | 134 | 112 |
| WORDS (M) | 405 | 7 | 13.7 | 15.8 | 16.5 | 16.9 | 18.8 | 20.1 | 20.4 | 22 | 23.1 | 25.7 | 27.7 | 27.4 | 28.7 | 29.1 | 28.8 | 29.9 | 33.1 | 34.8 | 35.5 |
| PER MIL | 1.85 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.06 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.09 | 0.58 | 0.51 | 1.46 | 2.83 | 2.33 | 3.19 | 3.35 | 2.75 | 3.85 | 3.16 |

## identify oneself with

| SECTION | ALL | 1820 | 1830 | 1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | 2010 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| FREQ | 227 | 3 | 5 | 13 | 8 | 8 | 10 | 13 | 12 | 18 | 10 | 14 | 11 | 28 | 32 | 20 | 7 | 3 | 4 | 3 | 5 |
| WORDS (M) | 405 | 7 | 13.7 | 15.8 | 16.5 | 16.9 | 18.8 | 20.1 | 20.4 | 22 | 23.1 | 25.7 | 27.7 | 27.4 | 28.7 | 29.1 | 28.8 | 29.9 | 33.1 | 34.8 | 35.5 |
| PER MIL | 0.56 | 0.43 | 0.36 | 0.82 | 0.48 | 0.47 | 0.53 | 0.65 | 0.59 | 0.82 | 0.43 | 0.54 | 0.4 | 1.02 | 1.12 | 0.69 | 0.24 | 0.1 | 0.12 | 0.09 | 0.14 |

## identify with

| SECTION | ALL | 1820 | 1830 | 1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | 2010 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| FREQ | 428 | 0 | 1 | 4 | 2 | 1 | 0 | 2 | 1 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 7 | 36 | 53 | 67 | 78 | 72 | 96 |
| WORDS (M) | 405 | 7 | 13.7 | 15.8 | 16.5 | 16.9 | 18.8 | 20.1 | 20.4 | 22 | 23.1 | 25.7 | 27.7 | 27.4 | 28.7 | 29.1 | 28.8 | 29.9 | 33.1 | 34.8 | 35.5 |
| PER MIL | 1.06 | 0 | 0.07 | 0.25 | 0.12 | 0.06 | 0 | 0.1 | 0.05 | 0.05 | 0.04 | 0.12 | 0.07 | 0.04 | 0.24 | 1.24 | 1.84 | 2.24 | 2.35 | 2.07 | 2.71 |

## commit oneself to

| SECTION | ALL | 1820 | 1830 | 1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | 2010 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| FREQ | 360 | 5 | 7 | 17 | 9 | 15 | 15 | 13 | 16 | 15 | 21 | 13 | 16 | 14 | 22 | 40 | 41 | 30 | 21 | 17 | 13 |
| WORDS (M) | 405 | 7 | 13.7 | 15.8 | 16.5 | 16.9 | 18.8 | 20.1 | 20.4 | 22 | 23.1 | 25.7 | 27.7 | 27.4 | 28.7 | 29.1 | 28.8 | 29.9 | 33.1 | 34.8 | 35.5 |
| PER MIL | 0.89 | 0.72 | 0.51 | 1.08 | 0.54 | 0.89 | 0.8 | 0.65 | 0.78 | 0.68 | 0.91 | 0.51 | 0.58 | 0.51 | 0.77 | 1.37 | 1.42 | 1 | 0.63 | 0.49 | 0.37 |

## commit to

| SECTION | ALL | 1820 | 1830 | 1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | 2010 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| FREQ | 435 | 8 | 14 | 14 | 13 | 15 | 13 | 13 | 10 | 6 | 9 | 2 | 5 | 6 | 2 | 5 | 12 | 23 | 44 | 92 | 129 |
| WORDS (M) | 405 | 7 | 13.7 | 15.8 | 16.5 | 16.9 | 18.8 | 20.1 | 20.4 | 22 | 23.1 | 25.7 | 27.7 | 27.4 | 28.7 | 29.1 | 28.8 | 29.9 | 33.1 | 34.8 | 35.5 |
| PER MIL | 1.07 | 1.15 | 1.02 | 0.89 | 0.79 | 0.89 | 0.69 | 0.65 | 0.49 | 0.27 | 0.39 | 0.08 | 0.18 | 0.22 | 0.07 | 0.17 | 0.42 | 0.77 | 1.33 | 2.64 | 3.64 |

## adapt oneself to

| SECTION | ALL | 1820 | 1830 | 1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | 2010 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| FREQ | 437 | 3 | 17 | 27 | 18 | 17 | 25 | 38 | 33 | 33 | 46 | 37 | 48 | 40 | 15 | 15 | 12 | 2 | 5 | 3 | 3 |
| WORDS (M) | 405 | 7 | 13.7 | 15.8 | 16.5 | 16.9 | 18.8 | 20.1 | 20.4 | 22 | 23.1 | 25.7 | 27.7 | 27.4 | 28.7 | 29.1 | 28.8 | 29.9 | 33.1 | 34.8 | 35.5 |
| PER MIL | 1.08 | 0.43 | 1.24 | 1.71 | 1.09 | 1 | 1.33 | 1.89 | 1.62 | 1.5 | 1.99 | 1.44 | 1.73 | 1.46 | 0.52 | 0.52 | 0.42 | 0.07 | 0.15 | 0.09 | 0.08 |

## adapt to

| SECTION | ALL | 1820 | 1830 | 1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | 2010 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| FREQ | 496 | 1 | 1 | 1 | 0 | 1 | 2 | 1 | 2 | 0 | 1 | 1 | 3 | 12 | 22 | 25 | 44 | 48 | 85 | 108 | 138 |
| WORDS (M) | 405 | 7 | 13.7 | 15.8 | 16.5 | 16.9 | 18.8 | 20.1 | 20.4 | 22 | 23.1 | 25.7 | 27.7 | 27.4 | 28.7 | 29.1 | 28.8 | 29.9 | 33.1 | 34.8 | 35.5 |
| PER MIL | 1.22 | 0.14 | 0.07 | 0.06 | 0 | 0.06 | 0.11 | 0.05 | 0.1 | 0 | 0.04 | 0.04 | 0.11 | 0.44 | 0.77 | 0.86 | 1.53 | 1.61 | 2.56 | 3.1 | 3.89 |

## surrender oneself to

| SECTION | ALL | 1820 | 1830 | 1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | 2010 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| FREQ | 117 | 4 | 11 | 5 | 8 | 5 | 5 | 9 | 10 | 10 | 9 | 4 | 5 | 4 | 4 | 4 | 6 | 3 | 4 | 2 | 5 |
| WORDS (M) | 405 | 7 | 13.7 | 15.8 | 16.5 | 16.9 | 18.8 | 20.1 | 20.4 | 22 | 23.1 | 25.7 | 27.7 | 27.4 | 28.7 | 29.1 | 28.8 | 29.9 | 33.1 | 34.8 | 35.5 |
| PER MIL | 0.29 | 0.57 | 0.8 | 0.32 | 0.48 | 0.3 | 0.27 | 0.45 | 0.49 | 0.46 | 0.39 | 0.16 | 0.18 | 0.15 | 0.14 | 0.14 | 0.21 | 0.1 | 0.12 | 0.06 | 0.14 |

## surrender to

| SECTION | ALL | 1820 | 1830 | 1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | 2010 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| FREQ | 787 | 13 | 21 | 20 | 15 | 21 | 27 | 26 | 30 | 42 | 45 | 62 | 47 | 64 | 54 | 47 | 42 | 53 | 59 | 51 | 48 |
| WORDS (M) | 405 | 7 | 13.7 | 15.8 | 16.5 | 16.9 | 18.8 | 20.1 | 20.4 | 22 | 23.1 | 25.7 | 27.7 | 27.4 | 28.7 | 29.1 | 28.8 | 29.9 | 33.1 | 34.8 | 35.5 |
| PER MIL | 1.94 | 1.86 | 1.53 | 1.27 | 0.91 | 1.24 | 1.44 | 1.3 | 1.47 | 1.91 | 1.95 | 2.41 | 1.7 | 2.34 | 1.88 | 1.61 | 1.46 | 1.78 | 1.78 | 1.46 | 1.35 |